

京都大学	博士（文学）	氏名	楊 洋
論文題目	中世日本に於ける四書の受容と学風の転換		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>漢唐経学と宋代儒学からそれぞれの適切な部分を探り、朱子自らの理学思想を系統的に述べた『四書章句集注』は、彼が一生のうちで最も精力を注いだ著作であり、朱子学の核心でもある。中世日本に於ける四書の読書史は、『四書章句集注』が十三世紀前半期に伝来してから、十七世紀に朱子学が江戸時代のイデオロギーとして樹立されるまで、凡そ四百年に及ぶ。鎌倉末期～南北朝時代において、四書は天皇家を中心とした貴族集団に受容され、政治改革の思潮をもたらす作用もあり、特に輝かしい存在であった。十五世紀以降になると、四書を学ぶ階層が、朝廷の公卿はもちろん、將軍家から地方の領主までの武士らにも広がる。本論は古記録・古鈔本・古版本を含む個々の文献に対する細緻な解説・考証を踏まえ、中世日本に於いて四書が書物として受容された経過を研究し、日本思想史の文脈からこの受容の意義を問い直し、そしてこの受容がどのように宋・元の学術潮流に繋がったかを解明しようと試みたものである。</p> <p>第一章「序論」は研究の背景と先行研究を紹介し、本論が研究史の中にどのように位置づけるかを論じ、今後の課題を展望する。研究の背景については、「宋代に於ける『道』の復興と四書学の発展」、「中世日本における朱子学伝来」、「二つの学風：古鈔本の世界に見られる四書講読の実態」の三節に分けて論じる。第一項は、宋代に於ける「道」の復興の学術史を論じ、四書がこのコンテクストにどのような位置を占めるかを論じる。第二節は、平安時代から鎌倉時代中期まで宮中の漢学学風を概観する一方、十三世紀前半期に禅僧が宋学を齎して教化に用い、学風の転換を始めたことを論じる。第三節は、大覚寺統と持明院統が四書を講読するにあたって、学風がどのように異なるか、しかもこの差異がどのように鈔本・抄物によって反映されるかを論じる。本論の先行研究としては、日本中世の儒学を考察する著作が挙げられる。この類の著作は江戸時代後期に初めて見られ、明治時代に盛んとなり、第二次世界大戦後に少なくなった。明治時代の著作は日本中世の儒学を考察するにあたり、まず江戸時代の朱子学を起点とする立場がある。明治時代に於ける急激な欧化への対抗という特定の歴史的な文脈から生み出されたこの立場は、当時の研究に共通するものであったのみならず、それ以降の研究の姿勢にも長く潜み続けた。本論の問題意識は先行研究と異なり、朱子学を伝来した時点から定着したものとして認識せず、複層的な宋学受容の脈絡を強調する。</p> <p>第二章「四書伝来前後の学風」は、四書及びほかの宋儒の著述の伝来につき確実な</p>			

記載が残る十三世紀に於いての漢学学風の転換を論じる。十三世紀中葉以前の日本の学風を論じるにあたっては、平安時代と鎌倉時代の大学寮や博士家をめぐる資料から、平安時代に起きた紀伝道の隆盛という動きが、唐代中期～宋代初期に文学を中心とした進士科が経学を中心とした明経科を抑えるに至る潮流と類似することを指摘する。13世紀中葉以後の学風については、円爾が宋から齎した書籍を基礎に編纂された『普門院経論章疏語録儒書等目録』を分析し、十三～十四世紀の禅僧の読書に現れた新たな動向につき考察する。『普門院経論章疏語録儒書等目録』が提示した当時の学問のながれは、虎関師錬と中巖円月にも見られる。虎関と中巖は、朱子学だけではなく、北宋の儒学思想も受容したことにつき注意した。

第三章「漢籍の読書記録から見た花園天皇の学問」は、鎌倉時代末期～南北朝初期に於いて朝廷の学風を考察するのに最も基礎かつ重要な史料である『花園天皇宸記』を読み、先行研究で誤読されている記載や見落とされた重要な事実を明らかにしようと試みた。まず朱子学が建武新政の指導的思想として働いたという学説の沿革を回顧し、鎌倉時代末期～南北朝時代初期に朱子学の果たした役割に関する従来の認識及びその問題点を整理する。つぎに『花園天皇宸記』の記載を踏まえ、花園天皇が退位以後に読書の方向を転じ、幼い頃から宮中の学風の薫陶を受けて培われた「風月」に対する好尚を捨て、四書と六経を読み、頻繁に朝臣を集めて儒家経書の「談義」を開いたことを論じる。第三節「学問の転換と理学」は、『花園天皇宸記』に見られる天皇退位以後に提唱された学問の理念、花園天皇が後醍醐天皇周辺の学問に対して抱いていた意見などを分析し、「学道之御記」「誠太子書」の意味を改めて解説し、「風月」を抑え、六経を重視する学問は、唐代の学風の影響を受けた平安時代以来の学風に対する反撥であり、宋学と同じ性格を持っていたことを論じる。花園天皇が提唱した経学は、それまでと同じく漢唐の訓詁注疏を基礎としていても、漢唐経学の仕組みと異なり、宋儒の経学と同じ関心を持っていたと考える。

第四章「南北朝の四書伝習——宮内庁書陵部所蔵の天授五・六年奥書本『孟子集注』について」は、宮内庁書陵部に所蔵される天授五・六年（一三七九～一三八〇）奥書本『孟子集注』について論じる。本写本は、南北朝時代唯一、そして日本最古の『孟子』写本である（宮内庁書陵部本『群書治要』に節抄された『孟子』を除く）。本写本について、『図書寮典籍解題』は「和州の榮山寺（大和宇智郡）行在所に於いて、唐本及び仲盛卿の自筆本を以て書写校合したもので、おそらく南朝に伝えた朝臣の手に成るものと推定」した。これに対して阿部隆一氏は、書陵部蔵本が「実は遙か時代の降った室町後期の移写にかかる」と異なった見解を示し、以後公刊された研究はいずれも阿部氏のこの結論を受け入れている。筆者は、本写本が天授五・六年に南朝の朝臣に書写された原本にほかならないと考え、本写本の抄写と校勘の過程を詳しく分析することによって、書写にあたって数種類の刊本と鈔本が利用されたことを明

らかにした。本写本は、十四世紀後半期に宋元版『四書集注』が南朝朝廷で流行した状況がある程度示している。

第五章は「中世後期共通の読書の底流：『四書章句』の流行について」である。室町時代の清原家の四書講釈は、持明院統の学風の延長線にあり、注釈と訓読には漢唐の古注疏と朱子の集注を併用するのみならず、後から伝来した朱子後学の疏釈集成書も屢々参照している。本章は程復心『四書章句』の版本の系譜及びそれが流行するに至った事情につき分析する。『四書章句』には、室町時代の禅僧と清原家の所蔵を経た元版が現存し、明代に編纂された『四書輯釈』・『四書通考』との合刊本が中世後期～近世初期日本に受容され、さらに明版を復刻した朝鮮版も近世初期に日本に齎された。本章は、『四書章句』への分析によって、元代の朱子学者が積極的に出版した『四書章句集注』の疏釈集成書が、どのように中世日本の四書講読を深化させ、室町時代の学風に影響を与えたかを明らかにする。

(論文審査の結果の要旨)

南宋の朱子(1130-1200)が、「大学」『論語』『孟子』『中庸』を儒学の根幹に関わる聖典一四書一として選定し、自ら注釈を加えた『四書章句集注』(以下、『四書集注』)は、その明晰で一貫性をそなえた体系ゆえに、当時隆盛を迎えつつあった民間出版業による書籍流通とあいまって、中国のみならず東アジア世界の儒学に大きな影響を与えるものとなった。本論は、朱子『四書集注』およびその解説書が、中世日本においてどのように受容されたかを、実証的に明らかにしようとした研究である。

日本における『四書集注』、より広くは宋学の受容に関しては、足利衍述による古典的な業績以来、岩橋小彌太・和島芳男・阿部隆一らによる多くの研究成果が日本国内では蓄積されている。しかし、日本における四書伝承を、中国側の視点に立って論じた研究は少ない。論者は、『四書集注』関係の資料を宮内庁書陵部・蓬左文庫等において調査し、『普門院経論章疏語録儒書等目録』『花園天皇宸記』や五山の禅僧の著述を利用し、宋学が中世日本でどのように受容され浸透したかについて、文献上の記載と現存版本・写本の書誌学的調査とを総合した分析を行っている。

研究史と問題点をあつかった第一章では、宋学がまだあまり日本に影響を及ぼしていなかった平安時代における日本漢学の学風につき要約したのち、13世紀以降に禅僧が宋学を持ち込み、それまでの漢唐風儒学から宋学への転換が始まること、大覚寺統と持明院統とで四書講読のあり方に差異が認められることを述べる。続く第二章では、『普門院経論章疏語録儒書等目録』により知られる日本に齎された外典類の特徴をまとめ、十三世紀日本で顕著な漢学の転換、さらに虎関師錬・中巖円月ら鎌倉期の禅僧の著述の内容から見て取れる宋学の影響について論じ、北宋から南宋までの学問が鎌倉期の禅僧によって重層的に受容されており、狭い意味での朱子学には限定されていないことを指摘する。

以上の二章が、より巨視的に中世日本における宋学の位置づけを論じているのに対して、つづく第三章は、好学の天皇として知られる花園天皇(在位1308~1318)の日記『花園天皇宸記』に見える天皇の読書・講義記録を詳細に検討したものである。その結果、在位中にそれまでの平安時代の知的伝統に沿って『史記』『漢書』『後漢書』『文選』を中心に読んでいた花園天皇が、退位後の元亨二年(1322)以降になると、かなり大きく学風を転換させ、かつて好んだ詩歌の「風月」を退け、儒学の五経重視へと態度を変え、『資治通鑑』や諸子にも注意を払うようになったことを見出している。興味深いのは、『花園天皇宸記』の記事が、後醍醐天皇とその周辺の学問に対して、儒学の純正性を失って儒仏混淆的な性格を強く帯びたものだとして批判的視線を向けているという論者の指摘である。足利衍述以来、建武新政に宋学の大義名分論が影響を与えたという説は、これまで一定の影響力を保ってきた。これに対して、論者は岩橋小彌太の説を支持し、後醍醐天皇周辺の学問を典型的宋学だったとするのは、江戸時代に官学として定着して以降の朱子学を投影した考え方であり、実際の鎌倉南北朝期の宋学は、北宋から南宋における、後世の朱子学から見ると異端的な言説まで

も含まれている重層的な性格を帯びたものであったことを論じる。

続く第四章と第五章は、論者が日本国内の図書館を訪れておこなった漢籍書誌研究の成果のうち、『四書集注』に関連する文献を選んだ論考である。論者が慎重に実物調査をおこなってきた結果から明らかになってきたのは、これら日本写本の異文注記が、中国福建の出版業者が印刷し、現在では失われてしまった俗本にみられた本文や注釈をしばしば保存する異文・注記を伝えていることである。

第四章は、日本最古の『孟子』写本として知られる宮内庁書陵部蔵の天授五・六年奥書本『孟子集注』の異文注記を、原本について詳細に調査した結果を踏まえ、本写本が室町後期の移写本であるという阿部隆一説を批判して天授五・六年書写の原本であると断定し、十四世紀後期の南朝朝廷の周辺で写本が作成されたこと、写本作成の過程では南朝の人々が参照できた複数の写本や中国刊本が利用されていることを論じたものである。現存の天授奥書本が、誤字訂正まで含めて原本をそのまま再現した後世の転写本である可能性を完全に否定するまでの論証にはさらなる根拠を示す必要があると考えられるが、いかなる校訂の段階を経て同写本が作られたかの過程をめぐる推定は、一定の説得力を持つ。中世日本の漢籍読書史の研究において天授奥書本が占める意義を、従来の研究を超えて明らかに示した点は、重要な貢献である。

第五章は、『四書集注』に対する後代の学者の解釈書の代表例として、日本の国立公文書館のみに元刊本の完本が残る程復心『四書章句』をとりあげる。本書が日本へとどのように伝わり、禅僧や清原家によってどのように受容されたかの過程を論じ、図解の多い体裁の『四書章句』が、東アジアで歓迎される存在となっていたことを示す。

全体を通じて、宋代におけるさまざまな系統の学問が日本へと伝わった後に、しばしば複数の要素が混淆し、中国において本来ありえない状態を呈する事実の指摘は、中国古典文献学に立脚する論者の視点の有効にはたらいたもので、高く評価される。一方で、日本の漢籍受容の在り方を検討するにあたり、日本所蔵の漢籍に依存することで研究がすすめやすい古代から中世への移行に偏り、中世から近世への移行がどのように果たされたかの検討がごく簡単になってしまった点は惜しまれる。中世以降の日本知識社会における漢籍の受容過程を追跡するにあたっては、抄物など和文の漢籍注釈書の重要度がきわめて高くなるし、訓点の検討も欠かすことができない。論者は、今後、文献学と思想史を融合させた研究を志しており、これらの不足は将来補われていくものと期待される。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成28年6月23日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。